A23 臨床症状の異なる患者から分離されたデングウイルスの媒介蚊体内での増殖

江下優樹[○]（久留米大・医）・長谷部 太（長崎大・熱研）・山田堅一郎（感染研）・五十嵐 章（長崎大・熱研）

Amplification of dengue viruses isolated from different clinical symptomatic patients in mosquito vector

Eshita Y., Hasebe F., Yamada K. and Igarashi A.

臨床的に重篤度の異なる患者から分離されたデング2型ウイルスを用いて、ネッタイシマカ体内での増殖を調べた。経口感染させた蚊を14日間飼育した後に、RT-PCR法でウイルスゲノムの有無を調べた。DSS由来のウイルスを吸液した蚊では75%、DHF grade 11では41.6%、DHF grade 1では16.6%、DFでは33.3%が陽性を示した。なお、4種類のウイルス液のFocus assayでは、 $5.5 \times 10^3 \sim 8.8 \times 10^4$ FFU/ml、antigen ELISAでは、64~180 EIA unit、C6/36細胞を用いたInfectivity assayでは、 $< 10^{-3} \sim \leq 10^{-3}$ であったことから、ウイルス間の顕著な差は認められなかった。これらのことから、少数例ではあるが、DSSを起こした患者から分離されたデング2型ウイルスは、蚊体内で増殖しやすい傾向が示唆された。

A24 ヤマダシマカに感染するWolbachiaについて

大塚 靖[○]・高岡広行（大分医大・感染予防医学）

Wolbachia infection in *Aedes flavopictus*

Otsuka, Y., Takaoka, H.

シマカ亜属（Subgenus *Stegomyia*）はそれらの種間での交配や卵巣の観察などから、いくつかの種は細胞質不和合性を起こすリケッチア様因子であるWolbachiaに感染していると考えられていた。今回ヤマダシマカ *Aedes flavopictus* をwsp遺伝子領域によるPCRによってWolbachiaに感染しているがわかった。近縁種であり細胞質不和合性が知られているヒトスジシマカ *Aedes albopictus* には異なる2種類のWolbachiaに感染しているが、ヤマダシマカも同様に2種類のWolbachiaに感染しており、それらの配列はヒトスジシマカのものに近いものであった。他の種に感染しているWolbachiaの配列や蚊自身のミトコンドリアCOI領域の配列とあわせて報告する。